Osaka University Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Satapatha-BrahmanaのVajapeyaに関する一考察 : Madhyandina派の比較研究 |
| Author(s) | 池田, 宣幸 |
| Citation | 待兼山論叢. 哲学篇. 2007, 41, p. 49-63 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/12006 |
| rights | 本文データはCiNiiから複製したものである |
| Note | |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

# Śatapatha-BrāhmaṇaのVājapeyaに関する一考察

## ——Mādhyandina 派と Kāṇva 派の比較研究——

池　田　宣　幸

### 1　はじめに

白 Yajurveda 学派の Brāhmaṇa 文献である Śatapatha-Brāhmaṇa（ŚB）は Mādhyandina 派（M）と Kāṇva 派（K）によって伝承されている。本稿では ŚB の Vājapeya の記述に関して、同じ学派の2分派の間にどのような違いが見られるのか、同祭式において重要な位置を占める「食物（ánna-）」に関する議論を中心に比較検討する。

### 2　ŚB の Vājapeya の概要

2. 1　Vājapeya はソーマ祭の1形態である。ソーマ祭の最も単純な形式である Agniṣṭoma は5日間にわたって行われ、1日目に祭主の潔斎、続く3日間に準備祭、最終日に3度の圧搾式から成る本祭が執り行われる。各圧搾式は、サーマヴェーダ祭官達による 12 の stotra（詠唱）、それと対を成すリグヴェーダ祭官達による 12 の śastra（讃誦）、諸々のグラハ（ソーマの搾り汁の汲み上げ、神格への献供、祭官達による摂取）の複雑な組み合わせで構成される。Agniṣṭoma を基本として順次 stotra と śastra が加わって形成される Ukthya、Ṣoḍaśin 等のソーマ祭のヴァリエーション[1] には、独自のグラハと犠牲獣が付加的要素として組み込まれている。Vājapeya ではさらに戦車競走、祭柱（yūpa-）登り、灌頂という王権儀礼的要素[2] が加わる。

2. 2　Vājapeya は基本型となる Agniṣṭoma に Ukthya、Ṣoḍaśin というように段階的に付加的要素が加わって（注 1 を見よ）形成された複合祭式である。記述に際しては、Agniṣṭoma から Ṣoḍaśin までの祭式に関する知識が前提となり、それらと重複する部分は省き Vājapeya 独自の付加的要素のみ扱うのを原則とする。ŚB の Vājapeya の記述箇所は M 5.1.1-2.2 ～ K 6.1.1-2.3 であり、共に 7 の brāhmaṇa[3] から成る。各 brāhmaṇa の切れ目は内容上の切れ目と一致する。内容は以下の項目に大別される。①概略（M 5.1.1 ～ K 6.1.1）、②グラハ（M 5.1.2 ～ K 6.1.2）、③犠牲獣（M 5.1.3 ～ K 6.1.3）、④戦車競走の準備（M 5.1.4 ～ K 6.1.4）、⑤戦車競走（M 5.1.5 ～ K 6.2.1）、⑥祭柱登り（M 5.2.1 ～ K 6.2.2）、⑦灌頂（M 5.2.2 ～ K 6.2.3）。ŚB の記述からは Agniṣṭoma の祭式日程から逸脱するものは見受けられないので、ŚB の Vājapeya は Agniṣṭoma と同じく 5 日間で終了する祭式であると考えられる。

①の中には準備儀礼に関する規定が一部含まれるが、5 日目の本祭における規定は②以下でなされる。各項目内の記述の順序は式次第とほぼ一致しているが、全体的にみると上述の項目の順序と式次第は一致しない構成になっている。つまり②と③で規定される行為は Agniṣṭoma の本祭日全般にわたるが、④から⑦に関しては Agniṣṭoma の本祭日の正午の圧搾式におけるごく限られた場面に限定される。

Agniṣṭoma においては正午の圧搾式の最初（1 日を通しては 6 番目）の stotra と śastra である Mādhyandina-pavamāna-stotra と Marutvatīya-śastra がなされた後、Māhendra-graha の汲み上げ、正午の圧搾式の 2 番目にあたる Pṛṣṭha-stotra と Niṣkevalya-śastra が続く。Vājapeya においては正午の圧搾式の最初の stotra と śastra がなされると Agniṣṭoma 本来の儀礼進行は中断し、代わって Vājapeya 独自の儀礼に移行する。祭主が乗る戦車を含む計 17 台の戦車によって行われる戦車競走、先端に小麦製の頭飾り（caṣāla-）が付い

た、高さ 17 aratni（長さの単位。1 aratni は肘から中指の先端までの長さ）の 8 角形の祭柱に祭主が梯子を使って登るという儀礼、玉座（āsandī-）に座った祭主にアドヴァリュ祭官がマントラを唱えながら食物を降り掛ける事によって帝王権（sā́mrājya-）を授与するという灌頂儀礼が連続して行われる。灌頂儀礼が終了すると再び Agniṣṭoma の儀礼進行に戻り、Māhendra-graha の汲み上げ以下が始まるが、ŚB における Vājapeya の記述はこの場面で終了する。

## 3 冒頭部分に関して

個々の儀礼行為の規定が始まる前に Vājapeya の由来譚、祭式全体の効果、祭主の資格等が冒頭部分で述べられる。これらの内容を前提として、Vājapeya で使用されるマントラや、祭式全体を構成する個々の儀礼行為の意義が説明される。よって儀礼行為の解釈に関して M と K を比較する前にこれらの記述を見ておく必要がある。

3. 1　由来譚ではプラジャーパティをめぐる争いが、神々とアスラ達との間に生じるが、アスラ達は思い上がり（atimāṇá-）によってその場から消えてしまう。この文脈でプラジャーパティは祭式、食物と等置される。(M 5.1.1.2 tébhyaḥ prajā́patir ātmā́naṃ prádadau. yajñó haiṣām āsa. yajñó hí devā́nām ánnam.「彼ら（神々）にプラジャーパティは自身を差し出した。祭式はこの者達のものであった。祭式は神々の食物だから。」／K 6.1.1.2 yajñó vái prajā́patiḥ. sá eṣām ánnam abhavad. yajñó hí devā́nām ánnam.「プラジャーパティは祭式なのだ。彼はこの者達（神々）の食物になった。祭式は神々の食物だから。」) それから神々の間でそうしたプラジャーパティ＝祭式＝食物[4] をめぐる争いが生じ、それを懸けて競走が行われ、ブリハス・パティはサヴィトリ神の prasava（促し、許可、権限賦与）の許で勝利する。

ブリハスパティはそれを用いて祭式をして後、上方（ūrdhvā- díś-）に昇る。それを慣わしとしてVājapeyaによって祭った者達は上方に上るのを常としていたが、アウパーヴィ・ジャーナシュルテーヤなる者が再び降り（prati-áva-ruh）たのを機に、Vājapeyaによって祭って上方に昇った者達は再び降りて来るようになる。同様にインドラもそれを用いて祭式をして後、上方に昇る。同じくそれを慣わしとして後の者達も上方に昇るが、アウパーヴィ・ジャーナシュルテーヤに従って再び降りて来るようになる[5]。

以上が由来譚のあらすじである。由来譚の中の、「神々の間でなされる競走」と「上方に昇った者達が再び降りて来る」という2つの要素がVājapeyaの主要儀礼である戦車競走と祭柱儀礼を根拠付けている。

3. 2　Vājapeyaを行うことによって祭主に齎される効果として冒頭部分で示されているのは、「（この）一切（M idám sárvam/ K sárvam）の獲得」と「帝王（samrā́j-）になる」ということの2つである。後者はVājapeyaの灌頂儀礼で祭主に帝王権を与えることを根拠付けている。

「（この）一切の獲得」に関してはその理由を「プラジャーパティ」と「この一切」との等置によって説明する。（Mのみ挙げる。5.1.1.8（～K 6.1.1.6）

sá yó vājapéyena yajáte | sá idáṁ sárvaṃ bhavati. sá idáṁ sárvam újjayati. prajā́patiṁ hy ùjjáyati. sárvam u hy èvèdáṃ prajā́patiḥ.「Vājapeyaによって祭る者はこの一切になる／支配する[6]。彼はこの一切を勝ち取る。プラジャーパティを勝ち取るのだから。一方プラジャーパティは他ならぬこの一切である／を司るから。」）

「帝王になる」ということは少し複雑な議論の中で示されている。先ずVājapeyaが誰に帰属するか、つまり誰に祭主として挙行する資格があるかという点に関して、祭官階級と王族階級に属する者を設定する。そこからVājapeyaとRājasūyaの優劣の議論に移り、その中で「帝王になる」と

いうことに言及する。(Mのみ挙げる。5.1.1.11-13（～K 6.1.1.8-9）sá vā eṣá brāhmaṇásyaivá yajñáḥ | yád enena bṛhaspátir áyajata. bráhma hí bṛhaspátir, bráhma hí brāhmaṇó. 'tho rājnyàsya yád enenéndró 'yajata. kṣatráṁ hīndraḥ, kṣatráṁ rājanyàḥ. ‖11‖ rājña evá rājasūyaṁ. | rājā vái rājasūyeneṣṭvā́ bhavati. ná vái brāhmaṇó rājyā́yālam. ávaraṃ vái rājasūyaṃ páram vājapéyaṃ ‖12‖ rājā vái rājasūyeneṣṭvā́ bhávati, | samrā́ḍ vājapéyenā́varaṁ hí rājyáṃ páraṁ sā́mrājyaṁ ... ‖13‖「11. そういうこの祭式はまさしく祭官階級に属する者のものである、当のものによってブリハスパティが祭ったから。ブリハスパティはブラフマンであり／を司り、祭官階級に属する者はブラフマンである／を司るから。また一方で［この祭式は］王族階級に属する者のものである、当のものによってインドラが祭ったから。インドラは支配権であり／を司り、王族階級に属する者は支配権である／を司るから。12. Rājasūyaは王だけのものである。Rājasūyaによって祭ってから王になるのだ。祭官階級に属するものは王権にふさわしくないのだ。Rājasāyaは劣っておりVājapeyaは優れているのだ。13. Rājasūyaによって祭ってから王になり、Vājapeyaによって帝王になるのだ。王権は劣っており帝王権は優れているから...」)

また、帝王をidáṃ（K idámなし）sárvaṁ sáṃvṛṅkte「この一切を総取りする」と定義する。これは先に挙げた「この一切の獲得」という効果を言い換えたものであると理解できる。

## 4 個々の儀礼解釈全般にみられるMとKの違い

以上の冒頭部分に関する記述を踏まえて、Vājapeyaを構成する個々の儀礼に関してMとKの解釈を比較検討する。

4. 1 競走準備の中で祭主の戦車をvediの内側に向けるという所作がある。

その際に唱えられるマントラに対する解釈にMとKの間に違いが見られる。

M 5.1.4.4 ...tásyāṃ no devāḥ savitā́ dhárma sāviṣad íti. tásyāṃ no devāḥ savitā́ yájamānaṁ suvatām íty evaìtád āha.「『(VSM 9. 5 b) そこ（＝ここにいるあらゆる生き物が入り込んだ大地）において駆り立てる神（サヴィトリ神）は我々の秩序を駆り立てるべし。』と言う。まさしく『そこにおいて駆り立てる神（サヴィトリ神）は我々の祭主を駆り立てよ。』と、これによって言っている。」

K 6.1.1.4 ...tásyāṃ no devāḥ savitā́ dhárma sāviṣag íti. tásyām devāḥ savitā́ yájamānaṁ sā́mrājyāya suvatām íty evaìtád āha, yájamāno hí dhármo, yád āha tásyāṃ no devāḥ savitā́ dhárma sāviṣag íti.「『(VSK 10. 2. 1) そこ（＝ここにいるあらゆる生き物が入り込んだ大地）において駆り立てる神（サヴィトリ神）は我々の秩序を駆り立てるべし。』と言う。『そこにおいて駆り立てる神（サヴィトリ神）は我々の秩序を駆り立てよ。』と言う時、秩序[7]とは祭主なのだから、まさしく『そこにおいて駆り立てる神（サヴィトリ神）は我々の祭主を帝王権へと駆り立てよ。』と、これによって言っている。」

マントラの dhárman- を yájamāna- に言い換えて説明するのは両者に共通する。しかしKは（dat.）sā́mrājyāya という語を補い、駆り立てるという行為の目的[8]を明示している。祭主が帝王になるということがVājapeya 全体の効果であることは既に見た。Kは、冒頭で述べられたVājapeya の効果という主題に立ち返りそれと対応させながらこのマントラを解釈しているといえる。

4. 2　戦車競走の中で、競走の前後にブリハスパティに対する caru[9]（献

供粥）を用いた諸行為がなされる。以下に引用するのはcaruの準備を規定した上で、それが何故ブリハスパティに捧げられるかを説明する箇所である。

M 5.1.4.13 átha yád bārhaspatyó bhávati. | bṛhaspátir hy ètám ágra udájayat. tásmād bārhaspatyó bhavati.「それから、ブリハスパティに対する［caru］が用いられることについて。ブリハスパティはこれを原初に勝ち取ったから。それ故ブリハスパティに対する［caru］が用いられる。」

K 6.1.4.12 bārhaspatyó bhavati. bṛhaspátir hy ètám ágre yajñám udájayat. tásmād bārhaspatyó bhavati.「ブリハスパティに対する［caru］が用いられる。ブリハスパティはこの祭式を原初に勝ち取ったから。それ故ブリハスパティに対する［caru］が用いられる。」

「ブリハスパティが原初に勝ち取った」ものはMはetámという一語で表されているが、Kはetám yajñámという語で表されており、またyajñá-という語はこの文脈の中で初めて出てくる語である。caruを馬に嗅がせる行為に対する説明（M 5.1.4.15～K 6.1.4.13）でも同様の違いがみられる。

M tád yád áśvān avaghrāpáyatīmám újjayānīti. tásmād vā́ áśvān ávaghrāpayati.「馬達に［caruを］嗅がせることについて。『私（祭主）はこれを勝ち取ろう。』と［考えて、馬達に嗅がせる］。それ故、馬達に嗅がせるのだ。」

K sá yád áśvān avaghrāpáyati. vīryàm evaìṣu etád dadhāty. átho idám ánnam imám yajñáṃ prajā́patim újjayānīti. táthā haitád ánnam etáṃ yajñáṃ prajā́patim újjayati.「馬達に［caruを］嗅がせることについて。他ならぬ勇猛さをこの者（馬）達に据える。また一方で『プラジャーパティでありこの

(imám) 祭式であるこの (idám) 食物を私は勝ち取ろう」と [考えて、馬達に嗅がせる]。そのようにしてプラジャーパティでありこの(etám) 祭式であるこの (etád) 食べ物を勝ち取る。」

M の etám、imám (ともに m.) が直接示すのは caru- (m.) であろう。一方 K は caru をこの祭式、あるいはそれと等価であるプラジャーパティ、食物という語で敷衍している。この、プラジャーパティ＝祭式＝食物の等置は冒頭部分の Vājapeya の由来譚に出てくることは既にみた。4. 1 で見たのと同様にここでも K は M よりも明確に、プリハスパティへの caru を用いたこれらの行為の意義を、冒頭の由来譚の主題と対応させて説明している。

上に挙げた諸例から、個々の儀礼解釈全般にみられる M と K の違いとして次のようなことが言える。つまり今話題となっている儀礼所作の背景や目的について、冒頭部分の内容を再度確認し、それとの対応を明確にしながら説明するという K の姿勢が両者の比較を通してみえてくる。

## 5 食物の獲得に関して

Vājapeya を行うことによって祭主に齎される効果として個々の儀礼に関する説明の中で繰り返し述べられるのは食物の獲得である。Vājapeya と食物との関係については冒頭部分でははっきり示されてはいない。しかしプラジャーパティを勝ち取るということは由来譚の主題であり、Vājapeya の主な目的はプラジャーパティ、あるいはそれと等価であるものの獲得である。またプラジャーパティと食物の等置は冒頭部分でなされていることは既に見たとおりである。食物は Vājapeya を構成する個々の儀礼要素の中に具体的にあるいは象徴的に幾度となく登場することからも、同祭式における食物の重要性は容易に理解できる。既に見たプリハスパティへの caru もその 1 例である。caru の重要性は、競走前後馬達に嗅がせる事に

加え、競走後に祭主が触れる事の中にも見られる。この点に関するMとKの記述を比較する。

M 5.1.5.25 átha bārhaspatyéna carúṇā pratyúpatiṣṭhate. | tám úpaspṛśaty. ánnaṃ vā́ eṣá újjayati yó vājapéyena yájate. 'nnapéyaṁ ha vái nā́maitád yád vājapéyaṃ. tád yád evaìtád ánnam udájaiṣīt ténaivaìtád etā́ṃ gátiṃ gatvā́ sáṁspṛśate. tád ātmán kurute.「それからブリハスパティに対するcaruをもって彼（祭官）は（祭主と）向かい合う。それ（caru）に彼（祭主）は触れる。Vājapeyaによって祭る者は食物を勝ち取るのだ。例のもの［つまり］VājapeyaはAnnapeyaと呼ばれるものなのだ。こうして彼が勝ち取った（aor. ind.）食べ物、他ならぬそれとこうして例の行き先に到った後に接触する[10]ことになる。それを自己の内に作り上げる。」

K 6.2.1.12;13 áthaiténa bārhaspatyéna carúṇā cā́tvāle pratyúpatiṣṭhanté. 'nnaṃ vā́ eṣá újjayati yó vājapéyena yájata. etád vái pratyákṣam ánnaṃ yác carúr. odanó hy èṣá. odanó hí pratyákṣam ánnaṃ. tásmāc carúr bhavati. ‖12‖ tám āgátyābhímṛśati. sá yád evaìtád ánnam ujjáyati ténaivaìtát sáṁspṛśate. tád ātmáni kurute. tád ātmáni dhatte. ‖13‖「12. それから例のブリハスパティに捧げるcaruをもってcātvālaのところで彼ら（祭官達）は（祭主と）向かい合う。例のもの［つまり］caruが食物であるということは明らかである。これは粥だから。粥が食物であるということは明らかだから。それ故caruが用いられる。13.（祭主は）それ（caru）に進み寄って触れる。こうして（祭主が）勝ち取る（pres. ind.）食物、他ならぬそれとこうして接触することになる。それを自己の内に作り上げる。それを自己の内に置く。」

M、Kいずれも（instr.）téna + sám-spṛś「（～と）接触する」という動詞を用いて食物との接触を述べている。しかしténaが受ける従属節の動

詞 úd-ji「勝ち取る」の語幹が異なる。Mは直説法アオリスト語幹、Kは直説法現在語幹を使用している。つまりMにおいては主節の行為がなされている段階で従属節の行為は既になされたものと認識されている。また sám-spṛś という動詞が用いられる帰結文の中で、Mでは etā́m gátim gatvā́「例の行き先に到った後に」という表現が出てくる。「例の行き先」が何を表すかということが直説法アオリスト語幹を使用した当該箇所の文の理解に関わると思われる。ここに挙げた箇所以外にも同じ枠組みの説明がMに2箇所出てくるが、Kにはその並行箇所のうち1箇所だけMと同じく etā́m gátim gatvā́「例の行き先に到った後に」という表現がみられ、さらにそれが別の言葉で言い換えられている。以下は、祭柱儀礼において祭主が祭柱に登った後、先端の小麦製の頭飾りに触れるという行為についての説明である。

> M 5.2.1.13 tád yád godhū́mān upaspṛśati | ...tád yád evaìtád ánnam udájaiṣīt ténaivaìtád etā́m gátim gatvā́ sáṁspṛśate.「さて小麦に触れることについて... こうして（祭主が）勝ち取った（aor. ind.）食べ物、他ならぬそれとこうして例の行き先に到った後に接触することになる。」
>
> K 6.2.2.10 ...sá yád godhū́mān abhimṛśáty... tád etā́m gátim gatvā́ yò 'syaiṣá jitáḥ svargó lokó yád etád ánnam ujjáyati ténaṁ sáṁspṛśate「... さて小麦達に触れることについて。... 例の行き先に、[つまり] この者（祭主）によって勝ち取られた例の天界に到って後、こうして（祭主が）勝ち取る（pres. ind.）食物、他ならぬそれと接触する。」

Kは「例の行き先」を yò 'syaiṣá jitáḥ svargó lokó「この者によって勝ち取られた例の天界」と補足している。祭主が祭柱に登る際に妻に言葉をかける規定に対する説明も同様である。

M 5.2.1.10 sá roksyán jāyā́m ā́mantrayate | jā́ya éhi svò róhāvéty. róhāvéty āha jāyā́. tád yáj jāyā́m āmantráyate…sárva etā́ṃ gátiṃ gachānīti. tásmāj jāyā́m ā́mantrayate.「彼（祭主）は登ろうとして妻に唱えかける、『妻よ、来い。(2人で）天に登ろう』と。『(2人で）登ろう』と妻は言う。妻に唱えかけることについて。…『私は完全な（欠損のない）者として例の行き先に行こう。』と考えて［妻に唱えかける］。それ故、妻に唱えかける。」

K 6.2.2.9 sá yūpā́ṁ roksyán jāyā́m ā́mantrayate jā́ya éhi svò rohāvéti. róhāvéti jāyā́ prátyāha. sá yád evā́ṃ jāyā́m ā́mantrayate … svargám u vā́ idā́ṃ lokā́ṁ roksyán bhavati yò 'syaiṣá jitáḥ svargó lokás. tád yád idám asyārdhám ātmánas téna saṃpádyate, téna saṃpádyaitā́ṃ jítim abhyútkrāmati yò 'syaiṣá jitáh svargó lokás. táthāsyehá nā̀tmánaḥ kíṃ caná hīyate.

「彼は登ろうとして妻に唱えかける、『(VSK 10.4.3)妻よ、来い。(2人で）天に登ろう』と。『(2人で）登ろう』と妻は答える。そのように妻に唱えかけることについて。... 一方この時、天界に、［つまり］この者（祭主）によって勝ち取られた例の天界に彼は登ろうとする。この時、この者自身の半分と一体となり、それと一体となってから例の獲得（物）に、［つまり］この者（祭主）によって勝ち取られた例の天界に向かって歩み出す。そのようにしてこの者自身の如何なるものもここ（地上）には残されない。」

小麦の頭飾りに触れる箇所と同じく、ここでもMはetā́ṃ gatím「例の行き先に」とのみあるのに対し、Kはyò 'syaiṣá jitáh svargó lokás「この者（祭主）によって勝ち取られた例の天界」がそれに対応している。Kの記述からは、祭柱に登ることは天界への出発、そしてその先端で小麦の頭飾りに触れるという行為は天界における祭主の食物との接触を意図したも

のであるということがはっきり分かる。Mの「例の行き先」も同様に天界を指すならば、従属節の動詞に直説法アオリスト語幹を用いる表現は、Vājapeya によってこの世で既に勝ち取った（aor. ind.）食物と祭主は死後天界において接触を持つという事を強調していると考えられる。

ところが yád evaìtád ánnam udájaiṣīt という表現に etā́m gátiṃ gatvā́ という語句が伴わない箇所もある。それは caru について初めて言及する箇所と、祭主の灌頂に先立って行われる（M）Vājaprasavīya/（K）Vājaprasavyā-āhuti（vā́ja- と prasavá- という語を含むマントラを伴ってなされる献供）の材料の準備に関して説明する箇所である。

> 5.1.4.12 átha bārhaspatyáṃ carúṃ naivārā́ṁ saptádaśaśarāvaṃ nírvapati. | ...tád yád evaìtád ánnam udájaiṣīt tád evàsmā etát karoti.「それから 17 śarāva から成る野生米から作られたブリハスパティに対する caru を準備して捧げる。... その時こうして（祭主が）勝ち取った（aor. ind.）食物、他ならぬそれをこの者（祭主）の為にこうして作り上げることになる。」
> 5.2.2.1 áthāsmā ánnaṁ sámbharaty...tád yád evaìtád ánnam udájaiṣīt tád evàsmā etát sámbharati.「それからこの者（祭主）の為に食物を集める... その時こうして（祭主が）勝ち取った（aor. ind.）食物、他ならぬそれをこの者（祭主）の為にこうして集めることになる。」

先に見た事例では主節の動詞の主語は祭主であったのに対し、この場合はアドヴァリュ祭官であり、etā́m gátiṃ gatvā́「例の行き先に到った後に」という表現は相応しくない。従ってこのような表現がなくても、従属節に直説法アオリスト語幹を、主節に直説法現在語幹を用いることにより「祭主が例の行き先（＝天界）に行った後」が了解されていると考える。

## 6 おわりに

本稿では Vājapeya に関する ŚBM と ŚBK の記述を比較検討した。今回扱った事例の中には Vājapeya に対する両者の理解自体を大きく隔てる様な違いは見受けられない。両者に見られる違いとは、M で簡略な表現で示されている事柄が K では言葉を補って分かり易く説明されていること、あるいは両者が同じ結論を異なった表現によって導き出しているということにあるといえる。

**注**

1) Agniṣṭoma の 12 対の stotra と śastra に 3 対が加えられ計 15 対からなる形式を Ukthya、さらに 1 対が加えられ計 16 対からなる形式を Ṣoḍaśin という。Vājapeya は Ṣoḍaśin の形式に 1 対が加えられ計 17 対の stotra と śastra から成る。

2) 戦車は、ヴェーダの王権儀礼である Rājasūya と Aśvamedha において使用される。灌頂は Rājasūya の中心的儀礼である。祭柱登りという儀礼自体は Vājapeya 独自のものであるが、祭柱の先端に到達した後に諸方を見渡すという行為に関しては Rājasūya の中に類似の要素が見られる。

3) ここでいう brāhmaṇa は ŚB のテキストの区分単位。

4) 争いの原因となっているものが代名詞で表されているが M では idám (n.)、K では ayám (m.) で表されている。(M 5.1.1.3 kásya na idám bhaviṣyatíti「我々のうちの誰のものにこれはなるのか」/ K 6.1.1.3 té ha devā́ mámāyám bhaviṣyati …「そこで神々は『これは私のものになるだろう、...』)

K の ayám が指示する語は神々に自身を差し出した prajā́pati- (m.) であろう。M の idám が指示する語は如何様にも考えられる。まず ánna- (n.) が第一に挙げられる。直前に prajā́pati- と等置されているので、これが尤もらしい。但し別の箇所で prajā́pati- と等置される idám sárvam、更にはここで由来が語られている vājapéya- (n.) そのものも可能性として考えられる。

5) M はこのように述べるが、K は M と若干異なる。つまりアウパーヴィジャーナシュルテーヤが再び降りて来る話は M ではブリハスパティ、インドラの話の後に反復されるが K ではインドラの話の後に一回しか出てこない。

6) idám bhū 構文 (Hoffmann,"Ved. idám bhū" Aufsätze zur Indoiranistik II, 1976, 557-559, 後藤敏文、「荷車と小屋住まい：ŚB *śālám as*」『印度学仏教学研究』55-2, 2007, 809-805) の適用の是非が問題となる。直後の「この一切を勝ち取る」

という表現を考えるならば勝ち取る対象そのものに「なる」というのは理解しづらく、この構文を適用するのが望ましいが、idám sárvam は bhū と úd-ji 両方の動詞と共に用いられるのに対し、これと等価関係にある prajāpáti- は úd-ji と共にしか用いられないのは何故かという問題が残る。Vājapeya を扱う部分ではその他にも idám bhū 構文を適用したほうがよいと思われる箇所がいくつかある。その中で、M では mahát + bhū とあるのに対し K は mahát + prá-āp が対応している箇所がある。(M 5.2.1.18 mahád vā́ ayám abhūd yò 'bhyáṣeci「灌頂を受けたこの者は偉大さになった／～を獲得した、支配したのだ。」～K 6.2.2.15 mahád vā́ ayám prā́pad yò 'bhyáṣeci「灌頂を受けたこの者は偉大さを獲得したのだ。」) mahát (n.), PW V 614 mahánt 4) a) Grösse, Macht.

7) 儀軌 (vidhi) のマントラでは中性形であるのに対し、釈義 (arthavāda) には男性形が用いられている。

8) 人 (acc.) + 物 (dat.) + sū「誰々をある物へと駆り立てる」は、例えば王権が関わる文脈では「王を王権へと駆り立てる、王位を与える、王として認める」という特別な意味で使用される。Gotō, "Materialien zu einer Liste altindischer Verbalformen"『国立民族学博物館研究報告』16-3, 1992, 692, Anm. 94 参照。

9) 玄米あるいは大麦を水または牛乳で煮た献供用の粥。日常的な粥は odana と呼ばれる。EINOO, "Altindische Getreidespeisen" MSS 44, 1985, 18f. 参照。

10) 儀軌では M acc. + úpa-spṛś, K acc. + abhí-mṛś という表現が、釈義では M、K 共に instr. + sám-spṛś となっている。instr. + sám によって、触れる対象との一体化が含意されているのか。

(大学院博士後期課程学生)

# SUMMARY


## A Note on the *Vājapeya* in the *Śatapatha-Brāhmaṇa* —Comparing *Mādhyandina* and *Kāṇva* Recensions—

Nobuyuki IKEDA

In this article I have dealt with *Vājapeya* described in the *Śatapatha-Brāhmaṇa*. By comparing the two recensions of this text, that of the *Mādhyandina* (M) and that of the *Kāṇva* (K), I have pointed out such differences as follows.

In the beginning part of *Vājapeya* section the outline of this ceremony is given. Explaining individual ritual conduct which composes this ceremony, the K clarifies the relation between its significance and the subject which has already been referred to in the beginning part.

Food plays an important role in this ceremony. In this respect there is a notable concept, that is, the *yajamāna* by touching the material which symbolizes food gets contact with it after he goes up to heaven. That is clearly explained in the K. Though such a clear explanation is not found in the M, the same concept may be understood from the context.


キーワード：Vājapeya, Śatapatha-Brāhmaṇa, Mādhyandina, Kāṇva, anna